東北大医短部紀要　7(1)：59～66，1998

看護学生の母性看護学学習前後の母性理念の変化

小山田信子，渡 邊 裕 美*，佐藤喜根子**，片岡千雅子**
杉 山 敏 子，板 垣 恵 子，小 林 淳 子，石田眞知子
寺島美紀子，山崎登志子，柏 倉 栄 子，菊 地 史 子
大槻美恵子，斎藤ひろみ***

東北大学医療技術短期大学部　看護学科
*東北大学医学部附属病院　看護部
**東北大学医療技術短期大学部　専攻科助産学特別専攻
***宮城県仙南保健所

Changes in Maternal Ideas of Nursing Students during Maternity Lectures and Practice

Nobuko OYAMADA, Hiromi WATANABE*, Kineko SATO**, Chikako KATAOKA**
Toshiko SUGIYAMA, Keiko ITAGAKI, Atsuko KOBAYASHI, Machiko ISHIDA
Mikiko TERASHIMA, Toshiko YAMAZAKI, Eiko KASHIWAGURA, Fumiko KIKUCHI
Mieko OTSUKI and Hiromi SAITOH***

Department of Nursing, College of Medical Sciences, Tohoku University
**Tohoku University Hospital*
***Course of Maternity Nursing, College of Medical Sciences, Tohoku University*
***Sennan Public Health Center, Miyagi Prefecture*

Key words：母性理念，母性意識，臨床実習，看護学生

There are some reports described that maternity education (lecture and practice) comes to maternal consciousness for many students. To clarify changes in the maternal consciousness or ideas before and after the maternity education, we carried out questionnaire conducted on our nursing students four times in 1994. In this study, we used Hanazawa's maternal ideas questionnaire form and scoring method. The form is made up of 27 questions, including 18 affirmative items and 9 negative ones.

The following findings were obtained. Correlation between affirmative items and lectures could not be found immediately after lectures. On the other hand, significant correlation could be found between affirmative items and negative ones, when compared the score after lecture and before practice, and also before and after practice. It seems that the maternity education is helpful to establish the maternal consciousness.

はじめに

母性意識について花沢[1]は，女性が母になるあるいは母であることの自覚とその自覚に基づく妊娠・分娩・育児への態度や価値観を包括した概念と述べ，後者を「母性理念」とよび，母性理念は生育史上の諸経験を基盤に形成されるとしている。平井[2]は思春期において子どもと接する機会に恵まれ子どものかわいさを味わえると，母親になったとき母性意識に目覚めるといっている。日本の出生数は昭和48年以降低下傾向にあり，平成7年の出生数は118万7,064人，合計特殊出生率は1.42となっており少子化が進行している[3]。ますます子どもの数が減り，子どもと接したことがないまま大人になる人が多くなる状況にあるといえる。母性看護学の学習が母性意識の発達に役立っているという報告[4)~6)]があるが，母性意識のどのような面が変化するのか，母性看護学の講義・臨床実習前後での母性理念の変化について，東北大学医療技術短期大学部看護学科(以下本学とする)平成6年度入学生を対象に調査を行ったので報告する。

方　法

1. 調査対象

本学平成6年度入学生80名である。

2. 対象の学習背景

母性に関連した講義は2年次1学期に開始される。第1学期は母性看護概論15時間，母性臨床看護I 30時間，第2学期に母性臨床看護II 45時間，母性保健30時間の計120時間である。母性講義開始前後の専門教育科目学習状況は図1の通りである。臨床実習としては1年次1単位の基礎看護Iが終了している。

3年次に行われる臨床実習は，東北大学医学部附属病院，仙台市保健所，宮城県保健所で行われる。成人看護I 130時間，成人看護II 225時間，成人看護III 135時間，老人看護135時間，小児看護135時間，母性看護135時間，地域看護45時間である。各実習は80名の学生が10名ずつの小グループに分かれローテイトしながら行われるため実習時期に差があり，実習科目の履修が，早いグループは4月，遅いグループでは11月から12月にかけてということになる（図2)。

3. 方法

調査は花沢の母性理念質問紙[1]とその集計方法を用いて行った。調査の主旨を説明し，2年次母性看護学（以下母性）講義開始前，母性講義終了後，3年次母性臨床実習開始前（以下実習開始前)，母性臨床実習終了時（以下実習終了時）の4回調査を行った（図1のABCD)。

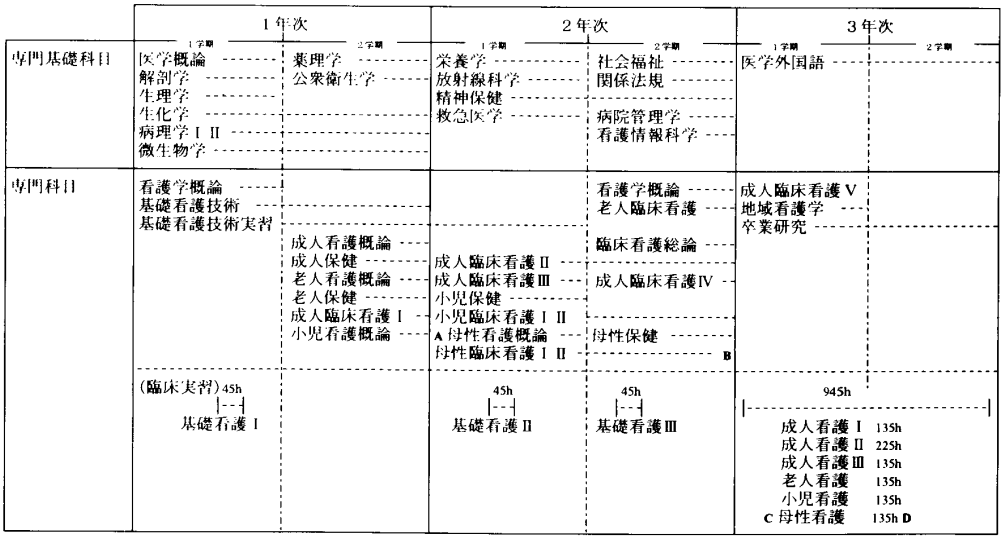

図1. 看護学科専門教育科目学習の背景

	3年次臨床実習25週								
	4月								11～12月
1 ｸﾞﾙｰﾌﾟ	**母性看護**	小児看護	地域看護	成人看護Ⅰ	老人看護	成人看護Ⅲ	成人看護Ⅱ	成人看護Ⅱ	成人看護Ⅲ
2	成人看護Ⅲ	**母性看護**		小児看護	成人看護Ⅰ	老人看護	成人看護Ⅲ	成人看護Ⅱ	成人看護Ⅱ
3	成人看護Ⅱ	成人看護Ⅲ		**母性看護**	小児看護	成人看護Ⅰ	老人看護	成人看護Ⅲ	成人看護Ⅱ
4	成人看護Ⅱ	成人看護Ⅱ		成人看護Ⅲ	**母性看護**	小児看護	成人看護Ⅰ	老人看護	成人看護Ⅲ
5	成人看護Ⅲ	成人看護Ⅱ		成人看護Ⅱ	成人看護Ⅲ	**母性看護**	小児看護	成人看護Ⅰ	老人看護
6	老人看護	成人看護Ⅲ		成人看護Ⅱ	成人看護Ⅱ	成人看護Ⅲ	**母性看護**	小児看護	成人看護Ⅰ
7	成人看護Ⅰ	老人看護		成人看護Ⅲ	成人看護Ⅱ	成人看護Ⅱ	成人看護Ⅲ	**母性看護**	小児看護
8	小児看護	成人看護Ⅰ		老人看護	成人看護Ⅲ	成人看護Ⅱ	成人看護Ⅱ	小児看護	**母性看護**

図2. グループ毎の実習配置

母性理念の27項目を肯定18項目，否定9項目に分け，採点法として非常にそう思う2点，そう思う1点，どちらともいえない0点，違う－1点，非常に違う－2点を配し，肯定得点，否定得点の合計した平均値（表1, 2）及び各項目毎の平均値（表3, 4）を算出した。統計処理はマイクロソフト社の統計処理パッケージ「エクセル95」を使用した。

結　　果

講義開始前後及び実習開始前後の母性理念肯定項目得点・否定項目得点の結果を表1と2に示す。

講義開始前の肯定項目得点は7.48±6.73（平均値±標準偏差）で，否定項目得点は－1.80±0.34であった。講義終了時の肯定項目得点は7.38±7.28で，否定項目得点は－1.28±3.91であった。

実習開始前の肯定項目得点は8.49±6.72，否定項目得点は－1.28±2.79で，実習終了後の肯定項目得点は10.87±6.84，否定項目得点は－2.36±3.46であった。

講義前後による肯定項目得点，否定項目得点に対応のあるt検定による有意差はみられなかったが，講義開始前と実習開始前において肯定項目平均に有意差がみられ（$p<0.05$），実習前後では肯定項目否定項目ともに有意差がみられた（$p<0.01$）。

講義開始前・実習開始前で差がみられた肯定項目は「赤ちゃんを産むことは女の特権である」，「女は子どもをもって人生の価値を知る」で，より肯定する方向に変化し（$p<0.05$），「赤ちゃんは母乳で育てるべきである」は否定する方向に変化した（$p<0.05$）（表3）。

実習前後の変化では，肯定項目に関しては「赤ちゃんは母乳で育てるべきである」1項目のみ否定する方向への変化で，他はより肯定する方への変化であった（表4）。有意差があったものは「妊娠は女性にとってすばらしい出来事だ」以下9項目であった。

表1. 母性理念肯定得点

	人数	平均	標準偏差	t
講義前	71	7.48	6.73	
講義後	53	7.38	7.28	*
実習前	78	8.19	6.72	
実習後	77	10.87	6.84	**

*：$p<0.05$, **：$p<0.01$

表2. 母性理念否定得点

	人数	平均	標準偏差	t
講義前	71	－1.80	3.04	
講義後	53	－1.28	3.91	
実習前	78	－1.28	2.79	
実習後	77	－2.36	3.46	*

*：$p<0.01$

否定項目に関して差があったのは「妊娠した自分の姿を想像すると惨めだ」，「育児に追われると若さが早く失われる」の2項目で（$p<0.01$），より否定する方向に変化した（表5）。

考　　察

母性看護の学習は大きく講義と実習に分けられるが，今回の調査において，実習前後の母性理念肯定項目否定項目はともに差がみられ，母性看護の学習は母性意識を変化させる[4)~6)]という内容を一部支持する結果であった。しかし講義の前後では変化がみられなかった。

母性の講義では，母性の特性を身体的精神的社会的に認識し，広く母性の一生を通じて健康に影

表 3.　講義前実習前肯定項目得点比較

項　　目	講　義　前			実　習　前		
	n	平均	標準偏差	n	平均	標準偏差
・妊娠は女にとってすばらしい出来事だ	71	1.10	0.67	77	1.22	0.66
・赤ちゃんを産むことは女の特権である	71	1.13	0.79	77	1.31	0.63*
・産んで初めて子どものかわいさがわかる	70	0.04	1.05	76	−0.05	1.07
・無事に産むためなら苦しみ我慢できる	70	0.44	0.97	77	0.31	0.83
・女は産むことで自分が生きた証拠を残す	68	−0.13	0.87	77	0.04	0.90
・赤ちゃんは母乳で育てるべきである	71	0.27	0.84	78	0.03	0.73*
・産んで育てるのは社会に対する女の務めである	70	−0.34	0.91	78	−0.21	0.90
・女は子どもをもって人生の価値を知る	71	−0.23	0.84	78	−0.01	0.88*
・女に向いているから育児するのが自然だ	71	−0.03	0.84	78	0.09	0.80
・産んで育てるのは自分の成長につながる	71	1.20	0.72	78	1.35	0.60
・産んで育てなければ女生まれの甲斐がない	69	−0.49	0.91	77	−0.27	0.85
・子どもがいると家庭生活は楽しくなる	71	1.25	0.67	78	1.27	0.59
・子の成長を見とどけるため長生きする	71	0.69	0.80	77	0.61	0.74
・母が子を自分の一部と感じるのは当然だ	71	0.41	0.99	78	0.58	0.91
・わが子のためなら自分を犠牲にできる	71	0.68	0.73	77	0.48	0.77
・子どもを育てるのは生みの母が最良だ	70	0.76	0.78	78	0.69	0.82
・子の存在を感じると生活に張りがでる	70	0.74	0.69	77	0.75	0.61
・育児に専念したいのが女の本音である	69	0.00	0.88	76	0.07	0.83

* : $p<0.05$

響を及ぼす諸因子について考察し，健康を守り，疾病の回復に必要な看護について学習することを目標としている[7]。母性看護の対象は女性のライフサイクルすべてとしているものの，母性臨床看護など教科によっては思春期・青年期のことよりは，妊娠分娩期の看護が中心となる。学生は将来の自分又は自分の配偶者に関わることと頭の中では理解しても実感がわかず，知識レベルにとどまってしまうのではないだろうか。講師の価値観により構成された講義内容であったとしても，母性看護学を科学的裏付けのある学問として学ぶのである。知識としては新鮮な驚きがあったとしても，それが即，個人的経験を重ねることにより形成され変容するものと考えられる母性理念にまで影響するとは考えにくい。講義終了は第2学年2月初めであり，学期末試験の後実習開始前までは約2ケ月の春季休暇がある。帰郷，アルバイト，旅行等教室を離れて社会の中で生活している人々との生

表 4. 実習前後肯定項目得点比較

項　　目	実　習　前			実　習　後		
	n	平均	標準偏差	*n*	平均	標準偏差
・妊娠は女にとってすばらしい出来事だ	77	1.22	0.66	77	1.49	0.59**
・赤ちゃんを産むことは女の特権である	77	1.31	0.63	77	1.39	0.67
・産んで初めて子どものかわいさがわかる	76	−0.05	1.07	77	0.42	1.09**
・無事に産むためなら苦しみ我慢できる	77	0.31	0.83	77	0.47	0.82
・女は産むことで自分が生きた証拠を残す	77	0.04	0.90	74	0.16	0.77
・赤ちゃんは母乳で育てるべきである	78	0.03	0.73	76	0.01	0.87
・産んで育てるのは社会に対する女の務めである	78	−0.21	0.90	76	0.04	0.80
・女は子どもをもって人生の価値を知る	78	−0.01	0.88	77	0.19	0.85*
・女に向いているから育児するのが自然だ	78	0.09	0.80	77	0.10	0.71
・産んで育てるのは自分の成長につながる	78	1.35	0.60	77	1.58	0.57**
・産んで育てなければ女生まれの甲斐がない	77	−0.27	0.85	77	0.08	0.94
・子どもがいると家庭生活は楽しくなる	78	1.27	0.59	76	1.43	0.57*
・子の成長を見とどけるため長生きする	77	0.61	0.74	77	0.73	0.83
・母が子を自分の一部と感じるのは当然だ	78	0.58	0.91	77	0.92	0.83**
・わが子のためなら自分を犠牲にできる	77	0.48	0.77	77	0.77	0.79**
・子どもを育てるのは生みの母が最良だ	78	0.69	0.82	77	0.71	0.82
・子の存在を感じると生活に張りがでる	77	0.75	0.61	77	1.16	0.72**
・育児に専念したいのが女の本音である	76	0.07	0.83	77	0.32	0.90**

*: $p<0.05$, **: $p<0.01$

のふれあいを経験する時間をもつことになる。「赤ちゃんを産むことは女の特権である」,「女は子どもをもって人生の価値を知る」の2項目がより肯定する方向の変化があったのは青年期の発達課題として自分の母性を考えた結果の変化なのか，母性の講義を受けたための変化なのか今回の調査だけでは明確ではない。近所や親戚の人に子どもが誕生したり，友達が結婚したり，そのような環境が身近にあったとき,講義の内容を思い出したり,自分なりの考えがみえたりなどということがあるのかもしれない。また特に著明な環境の変化はなくとも，たまたま見かけた親子連れを，ただの他人としてみるのでなく，互いに影響しあい成長しあっている母と子とみるなど，母性の講義を受けたために見方が変化した可能性も考えられる。今回の調査は母性実習前後で行ったが，3年次の実習はローテーションしながら行われるためグループによって母性以外の実習経験に差がある（図2)。今後は調査時期を検討し,3年次実習開始時にまず全体に調査を行いその後母性実習前後に調査するなどして，母性実習以外の影響の有無を明らかにしたい。

表 5.　実習前後否定項目得点比較

項　　目	実　習　前			実　習　後		
	n	平均	標準偏差	*n*	平均	標準偏差
・妊娠は自分の姿を想像すると惨めだ	77	−0.99	0.61	77	−1.19	0.72**
・女だけ妊娠出産の苦労をするのは不公平だ	77	−0.14	0.78	77	−0.31	0.96
・予定ない妊娠の場合人工妊娠中絶もやむを得ない	76	0.11	0.77	77	0.14	0.82
・結婚生活を楽しむため子どもはつくらない	78	−0.73	0.73	77	−0.90	0.75
・子を他人に預けても仕事を続けるべきだ	78	−0.26	0.52	77	−0.34	0.59
・育児は妻だけでなく夫も分担すべきだ	78	1.53	0.59	77	1.58	0.54
・育児に追われると若さが早く失われる	76	0.03	0.89	77	−0.30	0.97**
・育児からの解放で人間らしい生活ができる	78	−0.56	0.71	76	−0.64	0.79
・子の成長を生き甲斐にするのは間違いだ	78	−0.27	0.80	77	−0.42	0.78

**：$p<0.01$

今回の調査での母性理念項目の変化で注目すべきものとして「赤ちゃんは母乳で育てるべきである」の項目があげられる。講義の前後では差が見られなかったが，講義前と実習前の比較では否定の方向に変化し，実習前後では有意差はないもののやはり否定の方向の変化であった。

母乳は，乳児の発育健康維持増進のために必要な栄養素が最適の状態で含まれており，病気に対する抵抗力が強くまた精神的情緒的発達など母子相互作用の観点からも，その重要性が世界的関心事となっている[8]。平成元年 WHO/UNICEF 共同声明で母乳育児を成功させるための十ヵ条が発表され，本学実習病院である東北大学医学部附属病院においても，母乳栄養を推進すべく取り組んでいる。ポスターにより褥婦の啓蒙をはかるとともに，看護記録とは別個に乳房管理表を用い，毎日褥婦に乳房マッサージを行い，また褥婦には乳房の自己管理法を指導し，授乳指導は重要な産褥看護の一つである。産科病棟の授乳室に入ればいつでも褥婦や，授乳指導をしている助産婦の姿を見ることができる。また学生の実習においても，授乳の援助は授乳時間ごとの関わりになるため実施頻度も高く，乳房の状態・乳汁分泌状況は，実習期間中日々の変化が明らかで理解しやすい学習項目であると考える。母性臨床看護 I・II においても，母乳栄養の重要性と乳汁分泌促進に向けての援助は褥婦の看護の主要な部分として講義されている。なぜ否定の方向への変化だったのだろうか。

乳汁分泌状況は個人差があるが，教科書的には分娩後 3 日目ぐらいから次第に分泌量が増加する[9]と言われている。分娩後 24〜48 時間で母児同室となり，児の抱き方寝かせ方をはじめとして新生児の日常生活の養護の方法を一つ一つ褥婦は身につけてゆく。授乳にしても首のすわらない新生児を授乳のための抱き方から始め，頭の支え方，乳頭の清拭，乳頭のくわえさせ方，乳頭が児の口からはずれないような乳房の支え方，児の吸綴の確認，乳頭を含ませている時間の確認，乳頭を痛めないようなはずし方，反対側の乳房の授乳のために抱き直し，乳頭の清拭から始まり同様に行う。これを母児同室になってからは 3〜4 時間の授乳時間の度に行うのである。順調にいってもこれだけの細かな手技が必要であるのだが，ケースによっては乳頭が扁平で児がうまく吸い付けなかったり，褥婦と児のタイミングが合わずに吸い付かなかったり，また，うまく吸い付いているのに，授

乳前後の児の体重の差から出す直接授乳量が期待通りに増えていなかったりなどの場合がある。また，新生児に異常があって母児同室になれない褥婦がわが子のために搾乳する場面に遭遇することもある。褥婦が慣れない手つきで1滴1滴集めるように搾り，1 ml とか3 ml の母乳を嬉しそうにそのつど周産母子センターに届ける姿を学生が目にすることもある。乳汁が出始めた褥婦でも乳房の緊満状態が強く(うっ積状態[10])基底部を動かしじわじわ流れ出る乳汁を30分以上かけて10 ml とか20 ml とか哺乳壜に搾っていたり，乳頭に水泡や亀裂などできてしまっている褥婦に合うこともある。一口に母乳栄養というが，順調に児の必要量を分泌するようになるまで毎日の辛抱強い褥婦の努力が必要なのである。褥婦は児との相互作用[11]で，そして，その相互作用がスムーズに行われるように関わっている看護者の支援のもとに，苦労の多い育児のスタートを切る。学生は，褥婦が児との関わりをとおして成長させてゆきつつある褥婦の母性よりは，目の前で母乳栄養のために時間と労力をかけてその割には分泌量の増加が急激ではないことの方が印象に残るのであろう。褥婦の内面的充実よりは，身体的にあらわれる苦労を認識するのだろう。はじめから児に必要な量の乳汁が何の苦労もなく分泌するのではない。母乳栄養はファッション感覚で，楽にスマートにできるものでもないということを対象から認識させられる。哺乳室にはすでに調乳され，温めればすぐに使える状態になったミルクが冷蔵庫に保管してある。栄養的に母乳に近づいているミルクがあるのなら苦労して母乳を出さなくとも良いのではないだろうかと考えた可能性がある。

学生が母乳栄養で育ったかどうか，つまり，学生の母親の母乳栄養に対する意識が影響しているのではないかとも考えられる。母性意識のうちの母性理念という側面は，幼児期からの生育史のうちに生成され，個人的諸経験を重ねることにより形成され変容するものと考えられる[1]。また岩田[12]は，母性意識は一人っ子の場合母親との関係が密接であり，母親の影響を受けやすいといっている。平成6年入学学生はおよそ昭和50年前後生まれであるが，昭和40年代は母乳栄養率が減少し，昭和35年は1ケ月時の母乳栄養率が67.8%だったのが昭和45年には31.7%まで下がっている[13]。昭和49年のWHOの「乳児栄養と母乳哺育」の決議を受けて，昭和50年から3つのスローガン①出生後1.5ケ月までは母乳のみで育てよう，② 3ケ月まではできるだけ母乳のみでがんばろう，③4ケ月以降でも安易に人工ミルクに切り替えないで育てよう，を掲げて母乳に関する研究の推進，母乳育児に関する啓蒙運動が実施された。その結果，昭和55年には1ケ月時の母乳栄養率は45.7%まで回復した。平成6年度入学生の母親が育児を担当したであろう時期がこの母乳育児低迷期と重なる。人工栄養にかわるきっかけは，母乳不足ではという不安からのことが多く，母乳の利点を認めないということではない。母乳か人工栄養かという選択の時に母乳を選択しなかった母親の意識を，学生が受け継いでいる可能性もあるということが，今回の調査にも影響を及ぼしているのではないだろうか。今後調査すべきところと考える。

日々の産褥期の看護の中では乳房を「おっぱい」という言葉を使用して乳房管理を行うことが多い。女性は性について他人と話し合うことにためらいがあり，それだけにマスメディアに頼る傾向がある[14]。性教育の指導者は学校の先生，友人，週刊誌である[15]。乳房を，新生児が人間として生きていくための最も自然で優れた栄養を作り出す臓器という観点からでなく，マスメディアで取り上げられやすい性産業の対象という観点から，青年期の学生には外生殖器のひとつである「おっぱい」は見ること，触ること，その言葉を口にすることすら抵抗があるのではないだろうか。そのため，肯定しにくかったものとも考える。

林[16]は未婚の女子大生は「お産」に対して明と暗の両イメージを相克的に捉えていると言っている。女子大生は結婚こどもそして母親になることは人生を豊かにすると考えている反面，こどもに束縛されるという思いやお産への恐れ等も感じている[17]。出産に関する伝承を両親から十分に受けていないのではないだろうか。母娘関係は同じ女性として，また世代を超えた女性のつながりとし

て意識・態度の継承上重要な関係にある。お産は大変なものであると伝えるだけで終わらず，新しい生命の誕生の素晴らしい場面であるというところまで両親が伝えてほしいものである。母性意識が肯定と否定を繰り返しながら発達して，妊娠や出産体験，育児経験によってより明確な母性意識として発達し顕在化されていくもの[18]である。とすれば今回講義前実習前の比較で,「赤ちゃんは母乳で育てるべきである」の項目については否定への変化であったが，これから変容する可能性も十分あるわけである。

平成9年度カリキュラム改正により母性看護学実習時間が現行の3週から2週に減少した。これまでの教育内容が学生の母性意識に影響を与えたということを認識し，より充実した母性看護教育に向けて，さらなる検討が必要である。

おわりに

母性意識のなかの母性理念について，母性看護学学習による影響として,母性関係講義および,母性看護臨床実習前後での変化を調査した。

講義前後では母性理念に関して有意差はみられなかった。講義前と臨床実習前での比較において肯定項目の3項目で有意差があった。臨床実習前後では，母性理念の肯定項目否定項目ともに有意差が見られた。肯定項目中,「赤ちゃんは母乳で育てるべきである」は講義前実習前，臨床実習前後ともに否定する方向に変化した。

母性意識は変容しながら発達してゆく。看護者として母性意識を高めてゆけるよう，講義，実習内容の検討が重要である。

文　献

1) 花沢成一：母性意識の発達，母性心理学，医学書院，1992, p 9-60
2) 平井信義：思春期における母性意識の発達，産婦人科の世界，**33**(10), 41-44, 1981
3) 財団法人厚生統計協会編：出生，人口動態，厚生の指標臨時増刊　国民衛生の動向，**44**(9), 1997, p 44-48
4) 坂梨　薫，加藤千晶，小城原新，宮原　忍：母性看護実習が母性意識の発達変容に及ぼす影響—「女性に対する態度尺度」および「母性理念質問紙」の調査から—,母性衛生,**37**(1), 135-144, 1996
5) 森下節子：看護学生の母性意識の発達—母性看護学実習にみる意識の変容—，母性衛生，**33**(3), 297-303, 1992
6) 竹ノ上ケイ子，内海　滉：看護学生の母性性の発達に関する研究（2），日本看護研究学会雑誌，**15**(3), 9-19, 1992
7) 日本看護学校協議会編：母性看護学，最新看護学教育ガイダンス，医歯薬出版，1990, p 267-302
8) 財団法人厚生統計協会編：母子保健，厚生の指標臨時増刊　国民衛生の動向，**42**(9), 1995, p 104-113
9) 松本清一：褥婦および出生直後の新生児の看護，系統看護学講座 23　母子看護学 2,医学書院 1997, p 358-404
10) 根津八紘：循環異常，異常乳房，乳房管理学，諏訪メディカルサービス，1991, p 178-182
11) Klaus, M.H., Kennell, J.H.: Maternal-infant boding, The C.V. Mosby Company, 1976：竹内徹，柏木哲夫訳：相互作用，人間にみられる父親および母親らしい行動，母と子のきずな，医学書院，1979, p 86-108
12) 岩田銀子，早川有子，杉下知子，大和田信夫：医療技術短期大学生に於ける母性意識の構造に関与する要因の検討，母性衛生，**36**(2), 364-374, 1995
13) 財団法人厚生統計協会編：母子保健，厚生の指標臨時増刊　国民衛生の動向，**34**(9), 1987, p 101-108
14) 池田紀子，中川礼子，上田礼子：親になることとその情報源について（第2報）男子学生と女子学生の比較，母性衛生，**27**(4), 728-733, 1986
15) 久米美代子，常盤洋子：母性教育の観点から大学生の性意識に関する調査（その1），母性衛生，**34**(4), 445-453, 1993
16) 林マツノ，森田幸子，花沢成一：妊産婦と男女未婚青年の「お産イメージ」の現代的特徴，母性衛生，**34**(3), 287-290, 1993
17) 丸山知子，深沢華子，稲葉佳江，岡田洋子，東野妙子：女子大生の両親及び結婚と育児にたいする意識調査，母性衛生，**32**(1), 59-67, 1991
18) 竹ノ上ケイ子，内海　滉：看護学生の母性性の発達に関する研究（1），日本看護研究学会雑誌，**13**(4), 35-45, 1990